越谷市男女共同参画支援センター情報誌

みてみて ほっと越谷

VOL. 55
2024.7

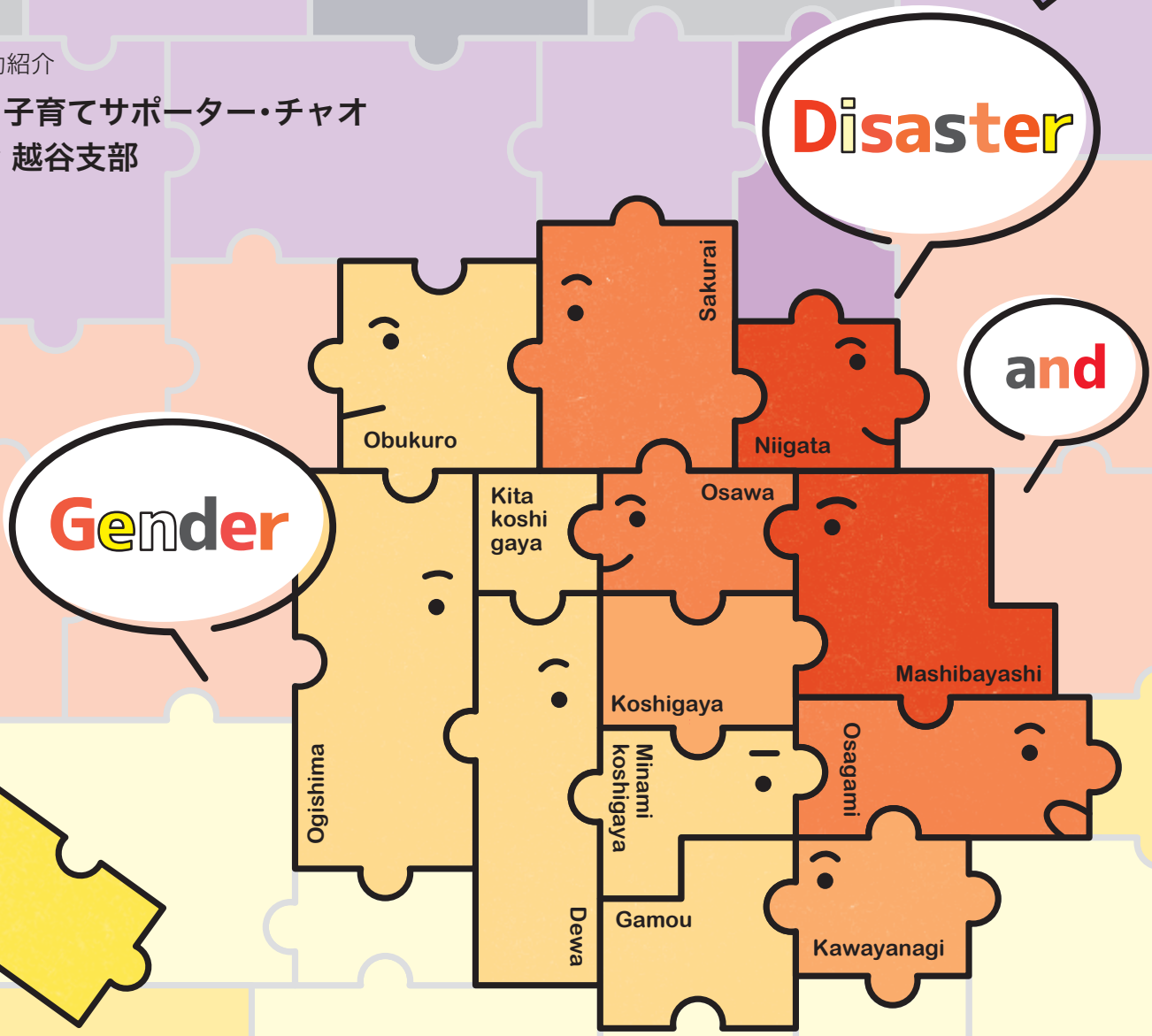
特集

災害で浮かび上がる ジェンダー格差

乗り越えるためにすべきこと

登録団体活動紹介

NPO 法人 子育てサポーター・チャオ
草加友の会 越谷支部



編集・発行　越谷市男女共同参画支援センター「ほっと越谷」
「ほっと越谷」は、越谷市の指定管理者制度導入により、2022年度から街活性室株式会社が管理・運営しています。
※この情報誌はホームページ（https://hot.koshigaya-center.jp）でもご覧になれます。

特集

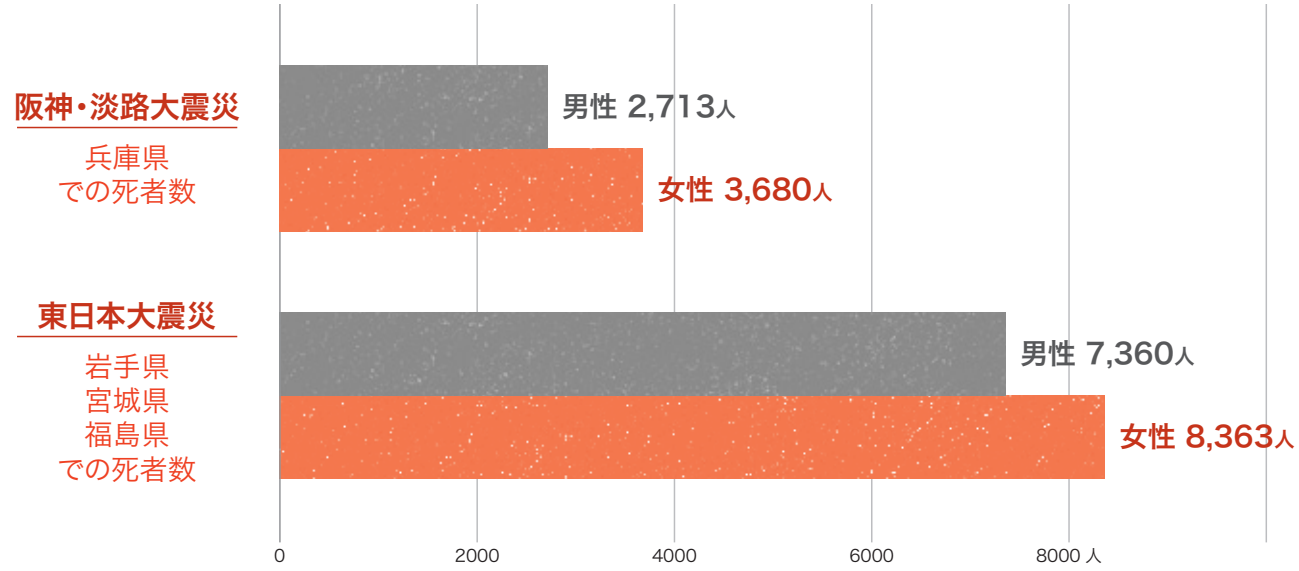
災害で浮かび上がるジェンダー格差

乗り越えるためにすべきこと

およそ６月から10月までの台風や集中豪雨による河川の氾濫や洪水などが起きやすい時期のことを出水期（しゅっすいき）と言います。出水期には全国各地で毎年のように被害があり、越谷でも令和５年６月２日から続いた大雨の影響で市域の４分の１が浸水するなどの被害を受けました。

今号では、災害による犠牲者の女性割合や自治体の担当部局の女性割合などの現状を踏まえたうえで、避難所のあり方、性的少数者の方への対応などを、能登半島地震でも活動した方々のインタビューをもとに考えていきます。

日本の災害における男女別の犠牲者数



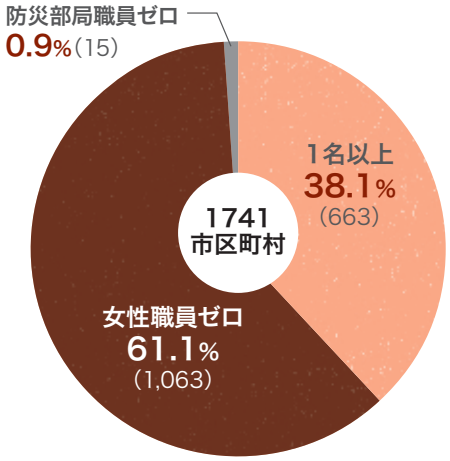
東日本大震災では性別不詳の死者63名も確認されている。
出所 平成24年版男女共同参画白書（全体版）

海外での自然災害でも女性が犠牲となる割合が高くなっています。1991年、死者・行方不明者６万８千人以上を出したバングラデシュの洪水では、女性の死者数は男性の５倍以上。2004年、死者・行方不明者30万人以上を出したスマトラ島沖大地震及びインド洋津波で被害を受けたインドネシア等の国々では、女性の死者数が男性の３～４倍にも上りました。インドネシアのアチェという村では、女性は木に登ったり泳いだりすることが良くないとされており、津波の際に生き残るための術が男性より制限されていたことが、女性死者数が多い要因の一つと考えられます。また、女性は介護や育児を担う事が多いため災害発生時の在宅率が高く、逃げ遅れた結果、犠牲が増えたことも考えられます。一方で、避難生活にも困難があります。熊本地震ではエコノミークラス症候群重症患者の約８割を女性が占めており、男女別ではない不衛生なトイレを敬遠して水分補給をしないこと、家族の世話を一身に負うこと、男性中心の避難所での生活全般が大きなストレスであることなどが理由として考えられます。災害後の生活の場となる避難所は自治体が開設し、住民が運営していきます。次に平時から備蓄や防災を進めている自治体の担当部局や防災会議の状況を見ていきます。

自治体の防災･危機管理部局の女性職員

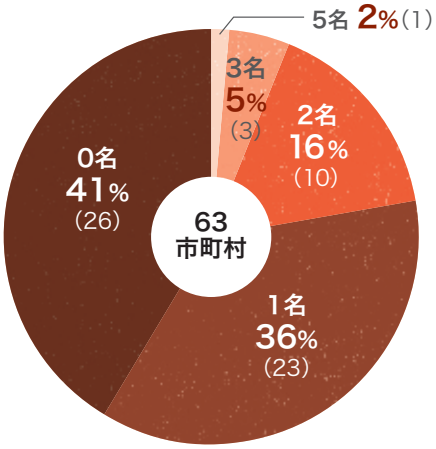
災害において大きな役割を果たす自治体の担当職員に女性が少ないことが内閣府の調査により明らかになりました。埼玉県内には防災・危機管理部局の女性職員ゼロの自治体が41％、1～2名が52％となっています。発災時はもちろん防災においても男女共同参画の視点からの対応ができるのか懸念されます。なお、越谷市は令和6年5月現在、担当部局11名のうち女性職員は1名となっています。

全国市区町村の防災・危機管理部局の女性職員数



※（　）内は市区町村数

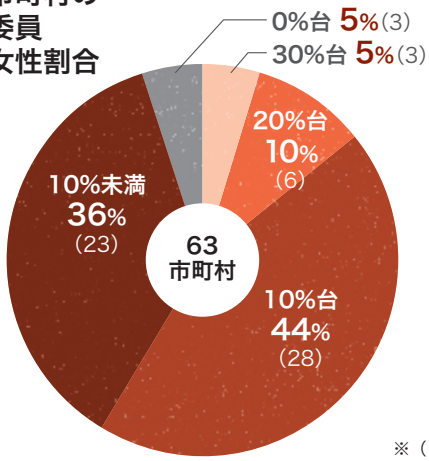
埼玉県内市町村の防災・危機管理部局の女性職員数



※（　）内は市町村数

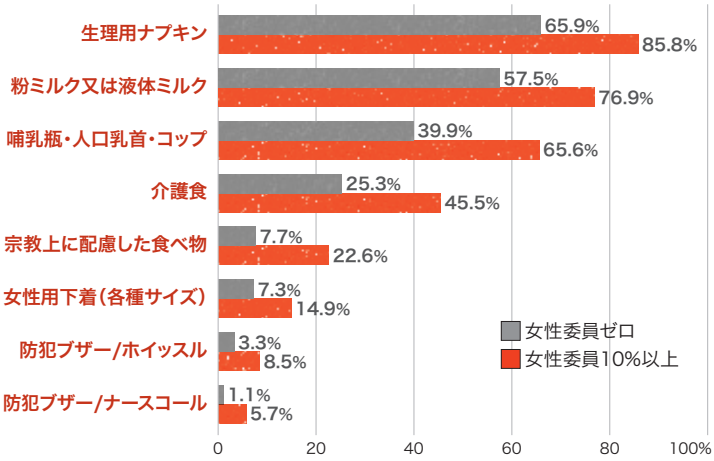
防災会議委員における女性割合と防災備蓄品の関係

埼玉県内市町村の防災会議委員における女性割合



※（　）内は市町村数

防災会議の女性委員割合と常備備蓄の割合の比率
（自治体に防災備蓄がある割合）



871 自治体のうち女性委員ゼロ…273　女性委員 10% 以上…598

防災会議は、災害対策基本法と自治体の防災会議条例に基づき設置されており、地域防災計画の作成と実施推進を担っています。令和3年時点で市町村防災会議の委員に占める女性割合は9.3%。国は令和7年までに、その割合を30%、女性がいない会議をゼロにすることを目指しています。越谷市は令和6年5月現在、防災会議委員40名のうち､女性は6名で15%となっています｡注目すべきは、女性委員がゼロの場合と10%以上の場合で発災後の避難生活のための備蓄の内容に大きな差がある点です。生理用ナプキンなど女性用品のみならず、介護食や宗教上に配慮した食べ物などの備蓄にも差があることは、女性が日常的にケア役割を担い困難を抱えている人と身近に触れ合う機会が多いことも一因と考えられます。女性が意見を自由に述べ、また決定権を持つ地位・役割に就くことが、災害リスクを減らすことにつながるのではないでしょうか。

このページのグラフは全て内閣府男女共同参画局「令和4年 地方公共団体における男女共同参画の視点からの防災・復興に係る取組状況について フォローアップ調査結果（概要）」および同「都道府県データ」より作成

避難所にジェンダーの視点を
～運営のポイント～

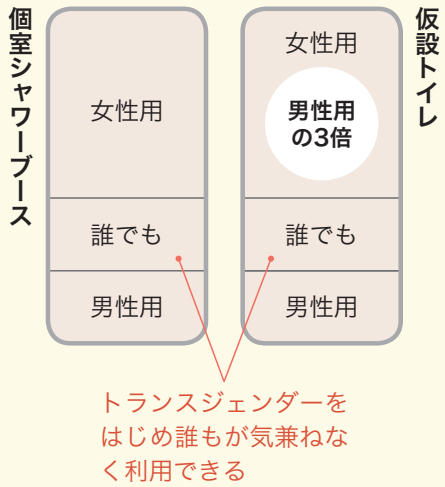
発災後や災害が進行中に開設される避難所。緊急時のコミュニティができあがり、被災した住民が中心になって運営されていきます。大規模災害時は、支援物資だけではなく外部団体が運営のサポートにかけつけることもあります。

どうすれば避難所をより良い場所にしていけるのか、能登半島地震後に穴水町（あなみずまち）と七尾（ななお）市の避難所で支援活動を行った小山内（おさない）さんにお話を伺いました。

小山内（おさない） 世喜子（せきこ） さん

（一社）男女共同参画地域みらいねっと代表理事。青森県を拠点に女性人材育成や男女共同参画の推進に取り組む。東日本大震災を契機に「防災」をツールに女性リーダーの育成にも取り組んでいる。

避難所レイアウト例



プライベート空間の確保

ダンボールの間仕切り、テント、インスタントハウスなど

※避難所のコミュニティ形成や要配慮者への寄り添いという観点から、仕切る程度は状況による。避難者状況把握（体調が悪い方など）、声かけのしやすさ、温度調整なども考慮に入れる。

POINT 1 一人ひとりの自発性を引き出す

ある避難所に段ボールベッドが届いたとき、ボランティアだけでなく、避難者の方といっしょに組み立てました。何かをしてもらうだけの存在ではなく主体的に動くようになってもらうのが大事です。ホワイトボードを設置して生活スケジュールや役割を書き出して現状をみんなで共有して助け合う体制もつくりました。避難所生活は自立・生活再建に向けての第一歩です。一人ひとりの自発性が大切です。

POINT 2 第三者が関わる

他の避難所を訪れたのは、地震から１ヶ月たって町役場から別の避難所に移動するタイミングでした。施設の清掃、避難所づくり及び入居者の部屋割の調整や、話し合いで役割分担を決める際のファシリテーターを担当しました。濃厚な地縁に基づく避難所の人間関係には利害関係のない第三者が進行や決定に関与することに意義があります。

POINT 3 女性同士だから言える

東日本大震災の時と比べると生理用品がなくて困ったということはなかったようです。ただ、高齢者向けの衣料・物資は届いていたものの、若い人向けのものは届かず、サニタリーショーツもなかった。10か月ぐらいの赤ちゃんがいる女性は、支援者のほとんどが男性で「これが欲しい」とは言えなかったそうなのですが、私たちには伝えてくれました。同性同士だからこそ必要なものを言える場合があります。

POINT 4 社会通念を変える

炊事や掃除など生活を支える役割は女性が率先して担っていました。できる人がやらざるを得ないのは開設当初は仕方がないこともあるでしょうが、２週間以上その状態が続いていることで、女性たちが疲弊して小規模な避難所が閉鎖になった例もあります。各地で根強く残る固定的性別役割分担意識が変わっていかないと、避難所も良くなっていきません。災害によってジェンダーの問題が顕在化します。避難所での女性へのケア役割の過度な負担はもちろん、女性へのつきまとい、性暴力も起こり得ます。平時における社会の課題が災害時に強化されます。平時から一人ひとりが尊重され、生活しやすい環境づくりをしていくことが大切です。

小山内さんのお話、埼玉県『男女共同参画の視点を取り入れた「みんなが安心できる避難所運営」のすすめ』をもとに作成

災害発生後の被災地の移り変わり

	発災	緊急期 ～３日程度	復旧期 数日～	復興期 数か月～数年	平常時 数年後～
住民の状況		緊急避難先など	避難所生活 被災家屋の片付け	仮設住宅での暮らし	再建住居や災害公営住宅などでの暮らし
優先事項		生命・安全確保	避難所などでの生活が原因の病気・関連死の防止	仮設住宅などでの生活が原因の病気・関連死の防止	発災時の減災対策
対応・対策で欠かせない存在		消防・警察・自衛隊	災害ボランティアセンター・自治体・住民・NPO・ボランティア	自治体・住民・NPO・ボランティア	自治体・住民・NPO・ボランティア

学生ボランティアが見た能登半島地震

今年の元日に起きた能登半島地震。住民の方たちの避難所での生活は続いています。被災地では女性をはじめマイノリティにとって厳しい状況があることも想像に難くありません。実際はどのようなものなのでしょうか。日本財団ボランティアセンターが募集した災害ボランティアとして、２月から３月に３回、石川県珠洲市の現場で活動した福岡さんに話を伺いました。

福岡 里美 さん

さいたま市出身・在住。2024 年３月大学卒業、2024 年４月から社会人。学生時代は気仙沼でもボランティアを行う。

――忘れられない光景

３月末の活動後に見た光景が特に印象に残っています。発災直後に、消防の方が倒壊家屋に住民の方が残っていないかどうかを示すために残したスプレーの跡が、３か月近く経ってもなお残っている。道路に面した家の壁面に記されており、切迫感と緊張感がひしひしと伝わってきて、そこだけ時間が止まっているかのようでした。

――活動に参加してみて、いま思うこと

１回目の活動が終わったとき、炊き出しや足湯で住民の方へ癒しを提供できているかもしれないと感じつつ、無力感もありました。でも、いまは知識やスキルが無くても「役に立ちたい」という想いだけでも充分だと思っています。ボランティアから戻って、家族や知り合いに現地であったことを話すと口を揃えて「知らなかった」「今もそういう状況なんだ」という反応があります。日常を送っていると、能登半島地震で被害を受けた人々の情報をキャッチすることが難しいのだろうと感じました。

――避難所の様子

私がはじめて避難所を訪れたのは発災から約１カ月が経ったころで、物資が足りないとは感じないものの、避難している方たちはとても疲弊しているように見えました。家の被災状況が不明で仮設住宅に移れるかどうかの見通しも立たず、ボランティアに行った私たち学生もどのように接するのが良いのか、日々考えながら１週間を過ごしました。２回目に訪れたときは様子が違い、以前は「洋服が届いても着飾る場所も無い」と言っていた方が新しい服を着て一泊旅行に行ったりもしていました。住民の方もボランティアに話しかけてくれました。日中は男性が外に働きに出ていることが多いからなのか、ご年配の女性が多かった印象があります。

――活動の内容

３回のうち、１・２回目は住民の方との関わりがメインでした。炊き出しをしたり、住民の方に足湯に入ってもらい手を揉みほぐしたりしながらお話をしました。３回目は災害復旧の活動がメインで、消防士のボランティアの方々といっしょに、倒壊した家屋の片付けをしました。大型のハンマーや電動工具を使って倒壊したブロック塀を砕き、使えなくなってしまった布団や家財道具を運び出しました。

――避難所運営に垣間見える男女共同参画

生理用品が足りないことや、もらうときに窓口が男性で困っているという場面には出くわすことはなく、住民の方が自発的に運営に携わってスムーズに日用品の配布などが行われていました。避難所リーダーの男性はお連れ合いの方に避難所運営を相談されていて、男女が対等な関係であると感じました。避難所生活で何か困ったことがあったとき、女性でも相談しやすいと感じました。

福岡さんが参加した『令和6年能登半島地震災害ボランティア』

名称	日程	内容
第２陣	２月１日（木）～７日（水）	避難所での足湯、炊き出し
第４陣	２月23日(金)～28日(水)	
第７陣	３月24日(日)～28日(木)	被災家屋の片付け、瓦礫撤去

主催である日本財団ボランティアセンターでは１月４日にスタッフが現地入りして以降、６月13日現在、10陣の派遣を行っている。

災害でセクシュアルマイノリティを孤立させないために

人口の 10% 前後と言われるセクシュアルマイノリティ (性的少数者) の方々は、自身のセクシュアリティを明かしていないことも多く、特にトランスジェンダー当事者の方は災害後に様々な困難に直面します。能登半島地震で支援活動を行った椎太（しいた）さんにお話を伺いました。

椎太（しいた） 信（のぶ） さん

GID Link 代表として能登半島地震 LGBTQ 専用相談窓口を開設。
福岡県研修講師団講師、トランスジェンダー（FTM）当事者。

――「入浴」相談から見えるもの

避難所での入浴は男女別であるため、治療途中のトランスジェンダーがひとりで入れるお風呂はないだろうかという相談が最も多く寄せられました。寒い時期なのに、お湯も水も出ない、体を拭くのも限界がある。相談はほぼ全て当事者本人ではなく友人や離れて暮らす家族から。本人からではないというのは「バレたらその地域に住めなくなる」ということなのかもしれません。ただし、私を含めて当事者にとってみれば避難所に行けないというのは当たり前でした。しかし、災害支援に関わり始めて、本当は「避難所に行ける」「必要な物資を分けてもらえる」はずなのにおかしいぞ！と気付きました。

――年配の当事者の苦しみ

当事者ではなく周りの方からの相談が多いとは夢にも思いませんでした。災害に限らず、SNS などでの相談は若い世代が多く、横のネットワークで支援窓口にもつながっています。一方で、私が担当する福岡県内の性的少数者の方向け電話相談には 60 代以上の方が多く「当事者の友人がいない」「誰にも打ち明けたことが無い」などの声が寄せられます。結婚をして孫もいるご年配のゲイの方から「家族を騙した自分が生きていていいのか」という相談もあり、その時代の差別や偏見がどれほどだったか感じさせられます。

――被災地での活動との連携

能登半島地震以前から災害での性的少数者の困難さを解消するための団体を準備中です。当事者の方の居場所づくりもしていきます。当事者支援の私たち、災害支援の研究者、専門医などがいっしょに活動を準備しています。研究者たちは能登にも入っていて、現地情報の共有や当事者からの相談も私たちにつなげてもらいました。トランス男性は、ホルモン治療が止まることで生理が始まってしまい、ボクサータイプの生理用ショーツが必要になります。こういった当事者ではないとわからないことがあります。

――これからに向けて

福岡では学校で先生や生徒へ話す機会は増えましたが、その周りの地域の方たちにとっては、性的少数者は「テレビの中のひと」。小規模の勉強会では講演より前に参加者同士が話す時間を取ってもらい「自分のお子さん／お孫さん／兄弟／親友からカミングアウトされたら？」を何か間違いか、正解かではなく、本音で話し合ってもらっています。理解できなくても大丈夫、けれど否定はしないでくださいねとも伝えます。特に年配の方たちは時代背景が違うので「こういう人もおるったいね」と小規模の会で我が事として捉えてもらう。この積み重ねが社会通念を変えていきます。性的少数者が平時から生きやすい社会にすることは、発災後の避難生活での孤立からの関連死を防ぐために必要だと思います。

相談無料！秘密厳守！

女性の生き方についてのなやみ相談、DV相談ができます

（祝日・年末年始を除く）

電話相談（予約不可）

☎048-963-9176	☎048-970-7415	
月～金曜日	水・金曜日	土曜日
午前 10 時 ～ 12 時 午後　1 時 ～　4 時	午後 5 時～8 時	午前 10 時～12 時 午後　1 時～　4 時

面接相談（要予約）

予約電話番号 ☎048-963-9176（月～金曜日 午前10時～午後4時）

相談時間：月～土曜日
午前 10 時～ 12 時、午後 1 時～ 4 時
（第 4 土曜日午後 2 時～ 4 時を除く）
※場所は予約時にお伝えします。

女性のための法律相談（要予約）

予約電話番号：☎048-963-9176（月～金曜日 午前10時～午後4時）
相談時間：毎月第４土曜日　午後２時～４時
※場所は予約時にお伝えします。

2024年度 「ほっと越谷」登録団体活動紹介

NPO法人 子育てサポーター・チャオ

私たちは子育ての応援団です！

1996年、越谷市男女共生のまちづくり推進市民会議に参加したメンバーの子育て調査をきっかけに、全国初の子育てサポーター養成講座を開催、チャオが発足しました。「せっかく親になったのだから、子どものいる毎日の暮らしを楽しいと実感でき、親子で充実した生活を送ることのできる地域をつくりたい」そんな子育て当事者たちの想いからスタートしました。子育てをもっともっと楽しめる社会を創ることを目的として、子育て支援という言葉も無い当時から「子育て中だって学びたい」「仲間が必要」「社会への参画」の三本柱を大事にしています。行政や関係団体との対等な立場で、事業としてずっと続けられるように、関わっている人たちが持ち出しするのではない運営をしています。現在は、児童館での親子向け企画、公民館での家庭教育学級、「ほっと越谷」でも開催している子育てサロン、講座などでの一時保育などを展開しています。

家庭訪問型子育て支援「ホームスタート」では妊婦さんや未就学児がいる家庭にホームビジターが定期的に訪問して、ママの気持ちを傾聴したり、いっしょに出かけたり、子育てを手伝う活動でボランティアも活躍しています。ぜひ、あなたの力を貸してください。お待ちしています。

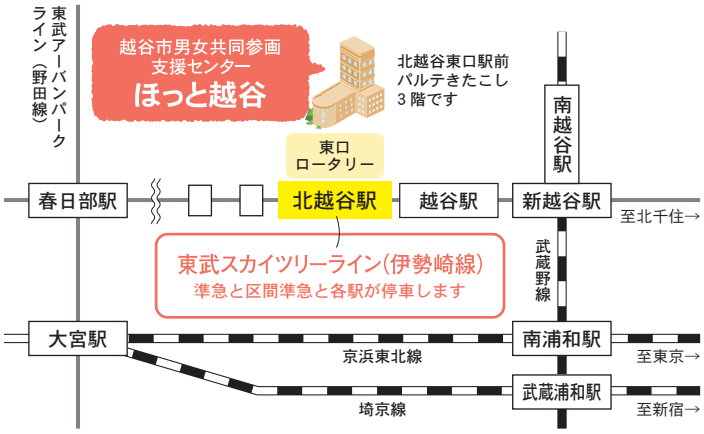
連絡先
E-mail: kosodatesapochao@gmail.com
ホームページ：https://www.kosodatesapochao.com/

草加友の会　越谷支部

心地よい暮らしを目指して

「日本初の女性ジャーナリスト」羽仁もと子が、夫である吉一と創刊した雑誌「婦人之友」の愛読者である女性たちによって1930年に生まれた友の会は、国内外に181あります。1974年に始まった草加友の会越谷支部は衣食住、家計、子育てなどを学び、家庭から健全な社会が広がることを願い活動しています。1997年頃には講演会や音楽会などを開催して資金を集め、杉戸町に草加友の家を建てました。定期的に、会員同士が集まり楽しく料理をしたり語らったり、子ども向け講座なども行い、多くの仲間たちといっしょに歩んできました。昨年からは草加友の家のオープンハウスも始め、「ほっと越谷」などいくつかの場所での展示も行いました。男性も催しに来てくれますが、違った関わり方も模索しています。羽仁もと子の想いを受けて、何か形にしていかなくてはと強く思いますが、彼女が生きた時代とは社会状況が異なっているので「愛・自由・協力」という当時の想いを大事にしつつ、会のあり方は時代に合わせて変えて、共感してもらえる方を増やしたいと考えています。人とひととのかかわり方を学べる場ですので、ぜひいらしてください。

連絡先
E-mail: soukatomonokai@gmail.com
ホームページ：https://soukatomo.jimdofree.com/



みてみてほっと越谷　第55号
令和6年7月1日発行（年2回発行）

編集・発行　越谷市男女共同参画支援センター「ほっと越谷」（指定管理者　街活性室株式会社）
所在地　〒343-0025　越谷市大沢3丁目6番1号 パルテきたこし3階
TEL　048-970-7411　FAX　048-970-7412
E-mail　hot-koshigaya@machikatsu.co.jp
URL　https://hot.koshigaya-center.jp
開所時間　午前9時～午後9時（日曜日は午後5時まで）
休所日　月曜日、祝日、年末年始（月曜日が祝日の場合は火曜日も休所）

この情報誌へのご感想をお寄せください▶

※最新の情報に関してはホームページでご確認ください。